

# 日本統治下台湾人用国語教科書と国定教科書の比較研究(その2) : 第二期読本を中心に

著者	陳 虹ブン
著者所属(日)	平安女学院大学国際観光学部
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	13
ページ	1-9
発行年	2013-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1475/00001301/">http://id.nii.ac.jp/1475/00001301/</a>

# 日本統治下台湾人用国語教科書と国定教科書の比較研究 (その2)

## — 第二期読本を中心に —

陳 虹彪

### はじめに

台湾における日本の植民地統治時期（1895-1945）に、台湾人生徒用の初等国語教科書は台湾総督府によって編纂されており、計全五期の教科書が刊行された。各時期の台湾人用国語教科書と国定教科書との比較研究を行うことにより、どのような教材は植民地だけのために作ったのか、どのような教材は国定教科書と同じ内容で教える必要があったかを明らかにすることができる。また、より具体的かつ正確的に台湾における植民地教育政策を検証することにもつながる。全五期の研究成果は数回に分けて発表する予定だが、本稿は台湾の第二期国語教科書「公学校用国民読本」（1913-1922、以下は「台二読本」とする）と国定国語教科書（第一期の「尋常小学読本」、「高等小学読本」及び第二期「尋常小学読本」を含む）を中心に分析したものであり、教材の配置や様式だけでなく、教材のテーマと内容も含め、国定国語教科書（以下は国定読本とする）と関連性のある教材をすべて特定したうえ、具体的な特徴や異同点を明らかにする<sup>1)</sup>。

### 1. 第二期『公学校用国民読本（1913-1922）』について<sup>2)</sup>

台二読本への改訂背景には日露戦争以降社会・経済情勢の変化が影響しており、植民地の開発と経済発展のために人力開発が重要な目標となっていた。このような状況を受け、当時の台湾総督府学務部長隈本繁吉による一連の教育構想が発表され、十数年間使われてきた第一期の『台湾教科用書 国民読本』の代わりとなる新しい国語教科書の編纂も計画された。学務部においては、まず1911（明治44）年12月以降に「改正読本の仮名遣・材料・文体・分量等の調査に着手し」、次いで1912（明治45）年4月に編纂に関する大体的方針を決定した。そして、1912（大正元）年12月以降に台二読本の各巻が順次に完成されたのである<sup>3)</sup>。

#### (1) 第二期公学校用国民読本の編修に関わる人々

学務部長隈本の日誌によれば、新読本の編纂を担当していたのは国語学校<sup>4)</sup>教授の「志保田（銚吉）」である。日誌の欄外に当時の編修課長小川（尚義）の名前も記されている<sup>5)</sup>。また、第二期の国語教科書編修業務を担当したのは総督府編修書記の栗田確であることも日誌の記録によって確認された<sup>6)</sup>。つまり、新国語読本の編纂は学務部長隈本繁吉の主導のもとで、総督府編修課のスタッフ及び、国語学校の教員が実際の編纂方針の制定や編集作業に関わっていたのであった。

#### (2) 隈本による国語学者芳賀矢一の台湾招致

台二読本は最初から「当時の国定読本即ち芳賀博士が中心となって編纂された尋常小学読本」を範例にし、内容に本島公学校にとって適切な教材を採択して編纂するとの方針が掲げられており、第二期国定国語教科書（以下は「国二読本」とする）をモデルにすると宣言されていた<sup>7)</sup>。新教科書の刊

行に際し、隈本は1913（大正2）年1月17日から28日までの間に国定本国語教科書編修担当者である芳賀矢一を台湾へ招いた。陳の研究によれば、この隈本による招致活動には「国語教育に託して“民族への同化”の志向性を強化していく動きの一環としての意味」が持たされているという<sup>8)</sup>。芳賀を台湾に招致した意図は、「新しい国語教科書取扱上の注意、趣旨説明を通して、国民性格の涵養をいかに確実に実施していくかという問題を解明してもらうこと」とされていたが、国語と国民性の関連性について、台湾全島をまわり、小公学校の教員を相手に講演してもらうことも目的の一つであった。芳賀の国語思想には、上田の国語論から引き継いだ祖先崇拜、忠君愛国などの思想が中心である。芳賀は1907（明治40）年に発表された『国民性十論』から、「日本の国民性研究」を行うようになり、研究を通して日本の「国民性」は何かを具体的な項目を挙げていた<sup>9)</sup>。

台湾での国語教育は広く浅く普及すべきだと主張する隈本にとって、祖先崇拜や具体的に養成できる「国民性」を提示している芳賀の主張が、台湾の国語普及事業に役立つものだと判断されたのであろう<sup>10)</sup>。よって、この訪問は隈本の主導下において、「国語を以って台湾人を「国体論」に組み込む体制が着々と整えられていった」ことをも意味していると指摘されている<sup>11)</sup>。

### (3) 第二期国語教科書と教授法について

台二読本の特徴として、教材の配列は表現形式を基本にしていること、台湾語を避けて国語で国語を教えること及び「一問一答」教授法を主張することが挙げられる。従来の練習主義の機械的発表を避けるために、1912（明治45）年4月から1913（大正2）年3月までにおいて、毛利編修書記（助手陳培漢訓導）が附属公学校で実地研究を積んだ成果として、台湾語の禁止と「一問一答」教授法を提唱した。「この方法は従来のと異って総督府から直接宣伝されたものだから、其の普及も速かで忽ち全島を風靡した」という<sup>12)</sup>。総督府による新教授法の採用とそれに基づく教科書の編纂は全体的に好影響を与えたという評判があったが、教材は表現形式を基とする排列様式なので、内容は形式的に流れてしまい、真に児童の情意を動かすような教材が欠けている。そして、技術的な練習に傾き、活きた言葉の練習となれなかった批判もあった<sup>13)</sup>。

### (4) 国定読本との編集上の異同点<sup>14)</sup>

1913（大正2）年に台二読本の編纂趣意書（巻一から巻八まで）が発表された。編纂趣意書によれば、国二読本を範例に編集するのは「分別書き方（人名に関する表記は例外あり）」、「読点」、「歴史的仮名遣い」、「口語の標準（東京語を基礎とし）」、「用紙、装丁、毎頁の行数・字数」などの部分である。

そして、国二読本と違う編集方針を取ると趣意書に説明があった点は「促音と拗音の書き方」、「漢字」の扱い、「言語と文章」、「挿絵」などの数点である。具体的には、促音と拗音の書き方は台湾人児童が発音を間違わないように、国定小学読本のような「ナツテ」「一シヨ」の表記法に従わず、国民読本の旧例に従い、「ナッテ」「一シヨ」のような表記法にすると説明している。漢字に関しては、国定読本は各巻各課における新出漢字の多少、字画の難易、字形、字義などを配慮し、細心工夫を凝らしているが、公学校は漢文科があるので、そこまでの細密な工夫はしないこととした。

なお、「言語と文章」について、国二読本は口語自然の形体と、文学的趣味とに重きを置くことができるが、台二読本は「先づ単純なる語句の形式に熟練せしめて、次第に複雑な文の構造に入るの主義を執り、或は故らに接続詞を加へて、長く続くべき文を二分し、或は已むを得ず平凡なる語句を用ひて、趣味を犠牲とせる所なきにあらず。又通常談話の間に漢語を交ふことは、本島人の最も陥り易き所にして、甚だ聞苦しきものなれば、本書編纂に当りては、なるべく漢語文又は文語に近き口語を避くること」としている。台湾の国語読本は日本語力の差により、編集様式を国定読本に似せるこ

とができて、全ての内容や文章の感性まで似せることは困難だという現実を、趣意書からも読み取ることができる。挿絵について、特に国二読本との相違点を強調しなかったが、「児童に的確なる印象を与えることを主眼」とし、人物・衣服・家屋に関しては「なるべく人民の多数を占むる、中流以下の社会の実況に適合するやうに注意し、一方に於ては時勢世運の趨向を察し、併せて帝国の風尚に近接せしむるを期す」としており、明らかに国定読本と違う取材方針となっている。

前述の方針によって作られた台二読本に対し、主に2点の批判があった。①「歴史的仮名遣の困難を避けるため、比較的によく漢字を使用したことと、読本の文章がやや生硬であったため、児童の共鳴を喚起しにくい」<sup>15)</sup>。②教授法によって「話方読方が固くなり過ぎ」、本当の「国語らしい感じが出ない」。そのため、「特に話方教授に力を入れようといふ傾向も現れた」という<sup>16)</sup>。

#### (5) 教材選択基準について<sup>17)</sup>

趣意書によれば、台二読本の教材出所は「或は国定読本により、或は旧国民読本より、或は其の他の諸書より之を採り、又全く起草者の手によりて新作したるもの」である。「他より採録せるものも、二三韻文を除く外は、原文のままのものは殆ど之なく、何れも児童の学力程度・時勢の進運・本島の事情等に鑑みて、多少の改竄を加へたり」しているとした。また、国民的童話や伝説に関する教材は、「台湾固有のものに至りては、一も之を採らず」とし、理由はその多くは淫猥、虚偽、貪欲などの悪徳にかかわるものだからである。なお、全体的な教材分量は台一読本より5割増しであることも明記されている。

## 2. 教材比較の方法と基準

前述のように、台二読本の編纂は国二読本を手本に行われ、国定読本も教材の出所の一つであることも趣意書に明記されている。本稿では台二読本の教材内容を中心に、教材のテーマや使われる素材、内容構成などによって国定読本と関連性のあるものを特定する。分析対象は「台一読本」と「台二読本」のそれぞれ計12冊（第一学年から第六学年用）、「国一読本」計8冊（第一学年から第四学年用）、「国一高等読本」計4冊（第五学年、第六学年相当）及び「国二読本」計12冊（第一学年から第六学年用）とする<sup>18)</sup>。

#### (1) 教材の相似度による振り分け基準

台二読本の巻一はタイトルも課の区別もないので、内容によって教材を区切り、ページ数で表記することにし、計29教材に分けて比較作業を行う。なお、台二読本の巻二も教材タイトルがないが、「課」の区別があり、趣意書にも仮のタイトルが付けられているので、全18課に分けて仮のタイトルを用いる。国定読本と同じタイトルの教材や、内容に関連性を持つ教材を特定したうえ、教材内容の相似度を低いものから順次にA、B、C、D、Eの五段階に分ける。Eは相似度が最も高いレベルとする。

- A：テーマは同じか近似しているが、内容や記述は全く違う。
- B：テーマは同じか近似しているが、一部の内容のみ相似している。
- C：テーマは同じか近似しているが、国定教材の内容は台湾より高度なものである。
- D：テーマと内容は同じか近似しているが、細部の記述にだけ違いがある。
- E：テーマと内容は全く同じか近似している（仮名遣いや漢字の違いを除く）。

#### (2) 教材内容による分類方法について

特定した教材の内容分類について、筆者は編纂記録や関連文献などに使われている分類項目を参考

し、「児童生活・遊戯と童話教材」、「日本文化・国体・皇室関連教材」、「徳性と公民常識教材」、「生活知識と実学教材」、「軍事・戦争教材」、「文学と趣味性教材」等六つの項目を設定した。また、台二読本の巻一と巻二は単語や数など初歩的な内容が中心であり、教材の分量も国二読本と大きな差があるため、教材数が占める割合などを計算するときに誤差も大きくなる。よって、教材内容の分類作業は巻三～巻十二のみを対象とする。

### 3. 国定読本の教材と関連性のある教材について

#### (1) 各巻における国定教材数

前述の基準を用い、「台二読本」を中心に「国一読本」「国一高等読本」「国二読本」との対照・比較作業を行い、その結果を表1にまとめた。表1には台二読本の各巻における国定関連教材の数が示されており、各期国定読本の内訳もその下に記入されている。

表1によれば、台二読本は巻一から国一読本と国二読本の教材を参考にして取り入れることがわかる。特に巻一と巻二を除く各巻には1/3から1/2の教材が国定読本と関連性があり、高学年読本の場合は約半分近くの教材が国定読本から取材している。しかし、それらの教材はそのまま国定読本から採用するのではなく、殆どの場合は台湾の編集者の手によって書き直されている。

表1 台二読本における国定読本と関連性のある教材数

巻数：共通教材数／全教材数					
巻一：18/29	巻三：12/20	巻五：10/21	巻七：8/22	巻九：11/23	巻十一：11/24
(国一：0 国二：18)	(国一：3 国二：9)	(国一：0 国二：10)	(国一：1 国二：7)	(国一：3 国二：8)	(国一：0 国二：11)
巻二：3/18	巻四：7/20	巻六：8/21	巻八：6/22	巻十：11/23	巻十二：8/24
(国一：3 国二：0)	(国一：0 国二：7)	(国一：1 国二：7)	(国一：1 国二：5)	(国一：1 国二：10)	(国一：0 国二：8)

注：国一読本から引き継いだ国二読本の教材の場合は国二読本の教材にカウントされる。

#### (2) 巻一と巻二の場合

台二読本の巻一は国二読本と同じように、最初の教材は「ハ」から始める単語を紹介しているが、国二読本は最初に日の丸を描いて「ハタ」を採用したが、台二読本は「ハナ」という単語を採用し、挿絵には台湾でよく見かけるブッソウゲの花が描かれている。このような台湾の自然風土を配慮する方針は全巻を通して共通のものである。教材のレベルから言えば、国二読本の巻一は桃太郎、弁慶の話や兎と亀の競走などの童話で終わるが、台二読本巻二は数の数え方で終わり、分量も難易度も国二読本巻一の半分ぐらいに止まった。ただ、台二読本の巻一には半数以上の教材が国定関連教材であることから、国二読本を意識して編集されていたことがわかる（表2）。

それに対し、台二読本の巻二は、国二読本ではなく、台一読本巻一の一部と巻二を基に書き直された教材が大半を占めている。国定教材も取り入れられているが、すべては国一読本から取材したものだった。そうした理由の一つは、台一読本の巻一では、最初に片仮名を教えてすぐに「オンナ ノ コ ガ キモノ オ キテイマス」のような文を取り入れたが、台二読本から国定教科書の形式に倣い、単語からの配列になったため、挨拶語など生徒の日常生活に密接した動詞文や家庭、家族や学校に関する初級会話教材が巻二に集中するようになったのである。また、前述した教授法「問答法」の影響により、会話形式に直された教材も多く採用され、第一人称で述べる教材も増えた。

#### (3) 巻三～巻十二について

前述した共通教材を相似度基準によって、巻三と巻四の分類結果を表3にまとめた。A類は計39教材、B類は計24教材、C類は計12教材、D類は計16教材、E類は計1教材がある。相似度の低

表2 台二読本（公学校用国民読本）巻一における国定教材

頁数	教材内容	相似度	出所と異同説明
1	ハナ	B	国三1 (p1) も「ハナ」だが、挿絵は桜。台二読本の挿絵は台湾でよく見かけるブッソウゲの花。
2	ハタ	B	国二1 (p1) も「ハタ」だが、挿絵は違う
3	タコ イト	B	国二1 (p2) は「タコ コマ」だが、風の挿絵は違う。国二読本には武将の顔が描かれているが、台二読本は花や多角形が描かれている。
5	コマ マリ	B	国二1 (p2) は「タコ コマ」だが、挿絵が違った。
7	ハシ イタ ハト アリ	B	国二1 (p3) に「ハト」があったが、挿絵は違った。
9	カサ カラカサ	B	国二1 (p10) に「アメ カサ カラカサ」があるが、挿絵は違う。台二読本は台湾服の男性が傘をさす。
10	サラ サカナ カマ クサ タケ	B	国二1 (p10) に皿の挿絵あり。文字なし。
13	ホンガアリマス。	B	国二1 (p19) の中の一文は同じだが、挿絵は違った。
14	フデトセキバン。	B	国二1 (p19) の中の一文と同じだが、挿絵は違った。
15	コガタナトハサミガアリマス。	B	国二1 (p11) にもハサミがある。
19	コレハキクノハナデス。	B	国二1 (p16) に「キクノゴモン」があるが、挿絵は違っている。
20	ココニシロイネコガキマス。 ソコニクロイヌガキマス。 	B	国二1 (p20) に「クロイ ネコ シロイ イヌ クビ ニ スズ」があり、挿絵の主役も同じだが、背景の家と挿絵の構図は違っている。 
22	ネエサンハジラカイトキマス。 イモウトハエヲミテキマス。 	B	この二つの教材は国二1 (p27) をベースに直したものであり、挿絵も台湾風に変えられた。 
23	ワタクシハエヲカイトキマス。	B	
24	ココニカタツムリガキマス。 一ピキニヒキ三ビキ、三ビキキマス。	A	国二1 (p26) の「カタツムリ」を数える教材に書き直したものである。台二読本の挿絵のカタツムリはバナナの葉っぱにいる。
28 29	コノイケニハカメガキマス。 一ピキハコチラヘオヨイデキマス。ニヒキハアノイシノウヘニアガッテキマス。	C	国二1 (p42-43) をアレンジしたものである。
30 31	ワタクシガトビマス。アナタハカザヘナサイ。一ペン二ヘン三ベン四ヘン五ヘン、五ヘントビマシタ。	C	国二1 (p.48-49) と同じ縄跳びをテーマにし、一遍、二遍の数え方を教えている。挿絵に描かれている子供の服装はお互いに違っている。
32 33	五十音表	C	国二1 (p.54-55) は五十音表（濁音、半濁音を含む）だが、台二読本は濁音・半濁音が含まれていない。

い教材は各巻とも配分されているが、相似度の高いものは主に低中学年に集中している。国定教材の内容を一部残したり、口語文に書き直したりするなどの中相似度教材は高学年読本に多く見られている。

#### ① A 類教材

A 類はタイトルや教材テーマが国定読本と同じだが、述べ方や取材の観点が違う教材である。A 類教材は全12巻読本にあり、合計数も最も多かった。その理由は、巻一の場合と同じように台湾の風土や生徒の生活環境の違いによるものである。例えば、新しく採用された台二読本巻三(5)の「ウサギトカメ」は国二読本(巻一)では挿絵のみの教材であった。挿絵の構図は似ているが、配置学年もレベルも違うので、教材の扱い方も違っていた。巻七(15)の「阿仁の日記」は国二読本と同じ日記形式を取っているが、中身は台湾児童の実際状況に合わせて作り直されている。



## ② B 類教材

B 類教材は国定読本の内容を一部のみ残し、ほかの内容を書き直した教材である。主に中高学年の読本に集中している。教材を作り直す基準は台湾人生徒と日本人生徒の日本語能力の差や台湾の社会・学校状況と自然環境によるものだと考えられる。例えば「トケイ」という教材は、国二読本巻四（14）では生徒に語りかけるような口調で時計の見方を簡単に説明するが、台二読本巻五（4）では擬人法による時計の紹介のみである。ほかにも「鳥」や「花のさまざま」などの教材において、台二読本は国二読本と違う動植物の例が取り入れられている。

## ③ C 類教材

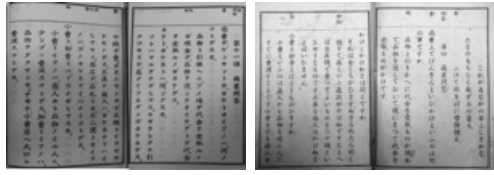
C 類教材は国定教材の内容や述べる順番などを崩すことなく、言葉や内容を易しくした教材である。最もよく取られる対処法は文語文教材を口語文に書き直すことである。B 類と同じく中高学年に集中している。難度を下げることは主に日本語能力への配慮だと考えられるが、一部の教材では、台湾の特殊性を考慮して一部の内容を添削することもある（例：巻十一（8）日本海海戦）。

## ④ D 類と E 類教材

E 類教材は台二読本巻四（5）の「時計ノ歌」のみであったが、D 類教材は低学年に最も多かった。例えば巻五（5）の「サザエノジマン」は内容も挿絵の構図も国定教材を手本にしているが、登場する魚の種類は変更され、編集上の順番を考えて、一部の形容詞と最後の値段の言い方が削除された。内容に合わせて、国定教材の挿絵にあった値段の張り紙も削除された。

表 3 共通点のある教材相似度分類表

分類項目	教材数	教材タイトル	
		第一、二、三学年	第四、五、六学年
A	39	巻三：5 ウサギトカメ、15 天長セツ、16 バセウト竹 巻四：7 ナゾ、8 私ノウチ、17 タウエ 巻五：3 エンソク、10 雷、19 母ノ手ツダヒ、 20 サルトカニ（一）、21 サルトカニ（二） 巻六：2 私どもの村、13 蜜柑おくる手紙	巻七：3 櫻、13 菅原道真、14 電報、15 阿仁ノ日記、 巻八：5 茶、12 竹、16 四季、19 石炭ト石油、 20 問い合せの手紙 巻九：3 新聞紙、12 温泉、19 富士山、22 生蕃 巻十：13 赤十字社、19 陶器ト漆器、22 昔の旅 巻十一：5 旅行先の父より、7 農業、11 花筵、 15 樺太だより、17 孔子 巻十二：5 看板ト広告、7 写真を贈る手紙、15 平和な村、17 学校落成式、24 卒業を知らず手紙
B	24	巻三：3 花、6 ヒヨコ 巻四：4 トケイ 巻五：9 かしこい子供 巻六：9 塩ト砂糖、10 モノサシ、杓、ハカリ	巻七：6 水ノ旅 巻八：10 鳥 巻九：1 皇大神官、2 花のさまざま、7 貨幣、 10 動物ノ保護色、14 水害見舞の手紙、 20 家畜 巻十：8 森林、11 人体、17 織物、18 蚕 巻十一：2 日本一の物、12 分業、16 測候所、 18 虫のさまざま、21 物の価 巻十二：22 人ノ本分
C	12	巻三：11 センタク 巻六：16 停車場	巻七：18 台湾、22 マッチ 巻九：11 空気 巻十：2 楠公父子（一）、3 楠公父子（二）、9 雨ト風、14 水兵の母 巻十一：8 日本海海戦 巻十二：6 貿易、19 主婦ノ務

分類項目	教材数	教材タイトル	
		第一、二、三学年	第四、五、六学年
D	16	卷三：1日ノデ、14コレガスデカラ、19夕方、2私ノ本、17四方、20月 卷四：1学校ヘモッテイクモノ、6犬ノヨクバリ 卷五：4蝶、5サザエノジマン、8ことわざ、17コクモツ 卷六：14古机、20はなさかぢぢい（一）、21はなさかぢぢい（二）	卷七：11 商業問答  国二読本（巻七4）
E	1	卷四：5時計ノ歌	

#### 4. 教材内容による分類結果について

台二読本から特定した国定教材（巻三～巻十二）をさらに内容の分類項目によって分類した結果、次の特徴が分かった。まず、低中学年の読本（巻三～巻八）において、「児童生活・遊戯と童話教材」と「生活知識と実学教材」が中心であった。巻三は特に児童生活に関わる教材が多い（12教材に6教材）。巻七（8教材に5教材）・巻八（6教材に6教材）の場合はほぼ実学関連教材に集中している。また、高学年読本（巻九～巻十二）について、巻九（11教材に9教材）、巻十（11教材に8教材）、巻十一（11教材に9教材）には実学関連の教材が中心だが、巻十二（8教材に6教材）は「徳性と公民常識教材」の項目が最も多く、「7写真を贈る手紙」「15平和な村」「17学校落成式」「19主婦ノ務」「22人ノ本分」「24卒業を知らず手紙」など公德・私徳を含む様々な公民教材が採用されている。実は、当時公学校では修身科がすでに設置され、教科書も編纂されているが、公民教材の数は国語読本から減る傾向は見られなかった。

次は、全体的な教材内容の配分を見てみよう。表4は台二読本の教材を内容によって分類を行い、国定読本から取材した教材と台湾で独自に作られた教材に分けてまとめた結果である。

表4 台湾第二期国語教科書（巻三-巻十二）における教材構成表

第二期 分類項目	国定読本からの教材			台湾独自の教材		
	教材数	各種教材割合	順位	教材数	各種教材割合	順位
児童生活・遊戯と童話教材	15	16.30%	2	13	10.16%	4
日本文化・国体・皇室関連教材	4	4.35%	5	19	14.84%	3
徳性と公民常識教材	15	16.30%	2	29	22.66%	2
軍事・戦争教材	2	2.17%	6	0	0.00%	6
生活知識と実学教材	51	55.43%	1	58	45.31%	1
文学と趣味性教材	5	5.43%	4	9	7.03%	5
各項目合計教材数	92			128		
国定教材総割合（巻一・巻二を除く）	41.82% (92/220)			58.18% (128/220)		
国定教材総割合	42.32% (113/267)			57.68% (154/267)		

表4のデータから、台二読本において、国定読本から取材した教材は全体の4割ぐらいを占めており、台湾独自の教材は6割を占めていることが明らかとなった。編纂計画を立てた当初から国定読本を手本にすると宣言した通りに、積極的に国定読本から教材を取り入れた結果だと考えられる。

教材内容から言えば、国定読本からの教材と台湾独自の教材の両方ともに「生活知識と実学教材」が4割～5割を占めており、数も最も多かった。その次に多い教材について、国定読本からの教材は「徳性と公民知識教材」と「児童生活・遊戯と童話教材」がともに2位で、台湾独自の教材は「徳性と公民知識教材」が2位で、3位が「日本文化・国体・皇室関連教材」である。それは台一読本と同



じように、台湾が持つ植民地という特殊性から、台湾専用の「日本文化・国体・皇室関連教材」を作る必要があったからだと考えられる。

## おわりに

台二読本の国定教科書をモデルとする方針変換は当時の学務部長隈本が深く関わっており、彼は内地から当時国定国語教科書の編纂の主宰である芳賀矢一を台湾まで招き、講演などの活動を行い、徹底的に総督府側によって国語教育の革新を図ったのである。この方針は、それ以降の国語教科書編纂にも基本的に引き継がれた。ただし、仮名遣いや表記などの編纂様式は国定教科書を範例にできても、日本語を常用しない台湾人生徒向けの教材選択や排列・配分方法は国定教科書と異なっていた。台二読本が編纂される以前の国語教授法は主に国語学校の専門家たちによって提出され、学校教育へ広まり、その後の教科書編纂に影響を与えるが、台二読本の場合は総督府学務課からの意図的な宣伝により、教授法から教科書まで行政側が主導するようになっていた。また、教材の分析結果からみると、隈本の狙いは台湾人児童を本土児童と同じような国語教育を受けさせることでなく、宗主国に忠実な植民地「国民」を育てることにあった。

なお、本稿によれば、台二読本には約4割の教材が国定読本からの教材である。この4割の教材には二つの特徴を持っている。一つ、実学教材、公民教材、児童生活関連教材が多く採用されているが、ほぼすべての教材は台湾の編修官の手によって修正されたものである。もう一つ、台二読本は同じ巻数の国二読本から教材を採用する傾向にあるが、日台生徒の日本語能力の差によってそのまま国定教科書から採用できる教材が少なく、台湾人生徒用に易しく書き直された教材が殆どであった。

今後は前述の結果を踏まえ、次に台湾の第三期国語教科書「公学校用国語読本」と国定国語教科書の比較を行い、その後台湾の国語教科書における全体的な変化を明らかにして行きたいと思う。

## 注

- 1) 第一期「台湾教科用書国民読本」に関する分析は拙稿「日本統治下台湾人用国語教科書と国定教科書の比較研究（その1）— 第一期読本を中心に —」（平安女学院大学研究年報第12号（2012.6）、pp.15-23）を参照。
- 2) 「公学校用国民読本」に関する概説の一部内容は筆者の「日本統治下台湾における国語科の成立と国語教科書編纂に関する歴史的研究 — 台湾総督府編修官加藤春城を中心に —」（東北大学博士論文、2007年3月、全215頁）の未発表内容より抄録したものである。
- 3) 「附録公学校用国民読本自卷一至卷八編纂趣意書」、『台湾教育』136号（1913.8.1）、pp.1-26。
- 4) 「国語学校」は1896年に設立された日本語教員を養成する台湾総督府直轄の学校であり、養成した教員は各地に設置される国語伝習所へ派遣されていた。1919年に「台北師範学校」と改称された。
- 5) 上沼八郎、「台湾総督府学務部長隈本繁吉『部務二関スル日誌』について」、『総合研究』第5号（1992.3）、p.A-66。
- 6) 矛盾生（岡本要八郎）、「第三百号」（『台湾教育』300号（1927）、p.119）。
- 7) 加藤春城、「教科書を通して観たる台湾国語教育の変遷 — 不動の方針と堅実な歩み」、『躍進台湾大観・続々編 — 奉祝紀元二千六百年台湾特輯記念号 —』所収（1939.8）、pp.41-43。
- 8) 陳培豊、「国語官僚学者、芳賀矢一」、『同化の同床異夢』第五章「文明の中へ」から「民族の中へ」所収（2001.2）、pp.160-162。
- 9) 同上8、pp.160-162。
- 10) 同上8、pp.142-164。
- 11) 同上8、pp.160-162。

- <sup>12)</sup> 加藤春城、「公学校に於ける国語問題（上）（下）」（初出『台湾教育』188-189号掲載）、『臺北師範学校創立三十周年記念祝賀会』（1926.10.17）、p.382。
- <sup>13)</sup> 加藤春城、「公学校用国語読本卷一、二編纂要旨（上）」、『台湾教育』419号（1937.6）、p.7。
- <sup>14)</sup> 同上3、pp.1-26。
- <sup>15)</sup> 同上7、pp.41-43。
- <sup>16)</sup> 同上7、pp.41-43。
- <sup>17)</sup> 同上3、pp.11-12。
- <sup>18)</sup> 研究対象とする教科書は『日治時期台湾公学校と国民学校国語読本』復刻版（台北：南天書局、2003）、『日本教科書大系 近代編第6巻』を参照。国定第一期の尋常小学読本の一部は現物を使用した。

【謝辞】本研究及び「日本統治下台湾人用国語教科書と国定教科書の比較研究（その1）— 第一期読本を中心に —」（平安女学院大学研究年報第12号（2012.6）、pp.15-23）は JSPS 科研費 23730775 の助成を受けたものである。

# A Comparative Study of the Second Series of Japanese Language Textbooks Used in Taiwan and National Textbooks Used in Japan during the Colonial Period

CHEN, Hung Wen

This paper attempts to explore how many of the Japanese teaching materials used in colonial Taiwan were taken from the national Japanese language textbooks adopted in Japan during the Taisho period. Through a variety of analyses, I intend to show that even if 40% of teaching materials in Taiwan were copied from the national textbooks, almost all of them were rewritten to a lower level, and that the contents were also changed to match the needs of the colonial government. In terms of the content of the materials, they were mostly related to the teaching of science and practical skills. The second most selected materials were the ones for moral education and rudimentary teaching materials. By examining the nature of the textbooks, we can also learn how the colonial government controlled the teaching materials to educate Taiwanese to become good citizens under the Japanese rule.